

村井実の子ども観と教育観に関する一考察

A Study on Minoru Murai's View of Children and View of Education

鎌田嘉彦*

Yoshihiko KAMATA

要約

近年、学校をめぐる状況は厳しさを増しているといわれている。子どもたちを取り巻く生活環境や社会環境は急速に変化しており、そうした変化に敏感に反応する子どもたちの思いや行動に親や学校(教師)が十分に対応できていないところに、その原因の一端があるように思われる。それは、急激に変化する社会や子どもたちに対して、親や教師は過去の自分自身の経験や体験に基づいた対応しかできないからでもある。親や教師が受けてきたこれまでの教育における子ども観やその教授の方法では、今後ますます激しくなるであろう情報化、国際化、少子高齢化、過疎過密化と連帯感の希薄化といった諸問題に、意欲的、主体的にかかわって自己実現をめざす子どもたちを育てることは難しい。

「子どもが主役」と言いながらも、子どもたちを教育の客体と捉えることの多かったこれまでの教育観を改め、真に子どもを主体とする教育の構築を目指すための方途は何か。この問題に対して、長年にわたって子ども観と教育観の関わりについての独自の提言を行ってきた村井実の教育思想を通して、今日的課題としてのあるべき子ども観と教育観についての考察を行った。

Abstract

In recent years, it is said that the circumstances surrounding school are becoming more severe. The living environment and the social environment surrounding children are rapidly changing, and parents and schools (teachers) are unable to respond adequately to the thoughts and behaviors of children who respond sensitively to such changes. It seems that there is one end. This is because parents and teachers can only deal with suddenly changing society and children based on their past experiences and experiences. In view of children's view and teaching methods that parents and teachers have received in previous education, informatization, internationalization, declining birthrate and aging, declining overpopulation and dilution of sense of solidarity It is difficult to nurture children who are motivated and subjectively aiming at problems, self-realization.

What is the way to revise the view of education so far that many children regarded children as educational objects while saying "children are the protagonists", aiming to truly create children's education. In response to this problem, through Mr. Minoru Murai's educational philosophy, which has made its own proposal on the relationship between child view and educational perception for many years, I examined the ideal view of children and educational view as a today's theme.

キーワード:

子ども観、教育観、村井実、教育思想

Key words:

Children's view, Educational philosophy, Educational thought, Minoru Murai

1 はじめに

平成27年3月の学校教育法施行規則の改正により「特別の教科 道徳」が誕生し、中学校では

平成31年度から全面实施されることになった。

この背景には教育基本法が改訂(平成18年12月)され、その中で「伝統と文化の尊重」、「我が

*本学特任准教授

国と郷土を愛する」ことが明記されたことが大きく影響しているが、それにも増して近年のいじめをはじめとする学校をめぐる諸問題の深刻化が喫緊の課題となっていることがあげられる。こうした課題の克服のため、今学校や教師に求められていることは何か。本稿では長年にわたり、子ども観と教育の在り方についての提言を続けている村井実の教育思想を手掛かりに考察する。

2 学校と教師

解決の糸口が見いだせない困難な場面に直面した場合、私たちは原点に立ち返ってものごとの本質を見つめなおすことが最良であることを経験上知っている。今日の複雑で容易ではない教育問題についても、教育の原点である「教育観」や「子ども観」に立ち返り、そのあるべき姿を再確認しそこに立脚した教育によってこそ、課題解決の糸口が見えてくる。また、私たちが当たり前のことと考えている「学校」についても、本当にそれが当たり前のものなのかどうか、吟味する必要がある。

村井は『新・教育学のすすめ』において、「人間とは「善く生きようとする動物」、あるいは、その意味で「向上心をもつ動物」と定義することができる¹⁾とし、「学校というものは・・・少しでも善く生きようという人間の向上心の自然の産物²⁾であるとしている。そして、学校の役割は「読み、書き、算をはじめ、自然や社会や人間についてのさまざまな知識、技術を学ぶところであり³⁾、「新鮮な知識や技術に立ち向かい、同じ仲間と交わり、先生に出会い、驚いたり、喜んだり、悲しんだり、くやしがり、得意がたりしながら、いわば自分の人間としての能力や人格⁴⁾を磨いていく場であり、その意味で「学校というのは、人間として善く生きるための最も基本的な経験の機会を与えてくれる、私たちにとってのかけがえのない場所」(これを村井は学校が私たちに贈ってくれる「最善のもの」、「最高の贈りもの」とする)⁵⁾だとし、それゆえ、学校での経験が人生の幸・不幸を決定的に左右することになる

とする。そして、村井は日本の学校はこの「最善のもの」、「最高の贈りもの」を私たちに用意しているのかとの問いを投げかける。

教師は今、学校のこの「最善のもの」、「最高の贈りもの」を見失ったり、見損なったりして「職業上の誇りと自信」を失って苦しんでおり、それが教育界のモラルの低下ともなっていると指摘する。しかし、「社会がとうとうとしてダメな方向に動けばこそ、それに対して、それへの抵抗力をつける仕事として、あるいはそれを逆転させる力をつける仕事として、教育という仕事、つまり教職の社会的意味があるのでなければなりません。社会がダメであればあるだけ、教育の仕事が大切になってくるのです。」⁶⁾として、困難な時代だからこそ、教師は学校のもつ「最善のもの」、「最高の贈りもの」を次代の担う子どもたちに与えていこうとする気概を強く持たなければならないと強く説く。

3 「善さ」とはなにか

村井はまた前掲『新・教育学のすすめ』のなかで、人間を「善くなろうとする生物」⁷⁾とも定義し、その子どももまた、「善くなろうとする生物」だとして、「善くなろう」とするメカニズムが子どもの中に生まれついて組み込まれていると説明する。また、子どもや若者が「善く」育つことを願わない親や大人はいないが、その「善く生きる」とはどう生きることなのかという問いに答えることができない。そこに今日の教育に関わる諸問題に適切に対応できない根本的な原因があるのではないかと示唆する。

村井によると、人間が子どもたちを「善く」したいと願ったところから、「教育」ということが生まれた。その意味で、「教育」というのは、子どもたちを「善く」しようとする働きかけとして普遍的に定義されることができる。だから、「善さ」ということをどう考えるかが、教育においては決定的に重要となる。その「善さ」の考え方には、「善さ」という性質が現実的なものとし

であるという考え方と、現実を超えたところに理想的なものとしてあるという考え方と、根本的な対立があり、現実に行われる教育は、この考え方の違いに応じて互いに異なったものとなるわけであり、そのことが教育の歴史に事実として示されている。「善さ」をそうしてあるものとする二つのタイプの考え方に対して、さらに第三のタイプとして、「善さ」はただ人間が自分に備わった「善さ」への働きの方向を示すことばにすぎないという考え方がありうるとし、彼はこの考え方が、教育上「善さ」の思い込みによるあらゆる対立や混乱、あるいは独断と圧制の危険を避けることができるという点で、そして子ども自身に持ちまへの「善さ」への働きの自由に展開させることができるという意味で、「善さ」についてもすぐれた考え方と思われるとしている。

村井はまた、『人間と教育の根源を問う』⁸⁾において「善さ」について次のように論じる。歴史的に見ると、ソクラテスは「善さ」とはなにかということを考えることの大切さを説いたが、「善さ」とはなにかについてはなにも答えず、人は「善さ」について無知であることを自覚すること、そこから真理探究の精神を説いた。次いでプラトンはイデア論を展開し、永遠の絶対的な「善さ」の存在を主張した。一方、アリストテレスは個々の「善さ」を超えた最高の「善さ」(普遍的、絶対的)を最高善と呼び、子どもたちをこの最高善に近づけることが教育の役割だとした。中世ヨーロッパ世界においては、アリストテレスの最高善を神であるとして神への絶対服従が説かれた。18世紀になって産業革命が進展するようになると、アダム・スミスやベンサムは、人間は「善さ」を求めるといふ古代から中世を貫いた考えに代わって、「快さ」を求めるのが人間の新しい合理的な生き方だといふ考えを示し、そうした考えが一般的になった。

こうした結果、「現代の教育はただ国家や社会の繁栄をめざして、人間と社会の「快さ」の増大のために経済や政治や科学などの知識を「教える」といふ、そしてその「教え」によって人間を

「作」ろうなどという、奢った、ただそれだけの仕事」になってしまったという。そこから、村井は教育の再生のプロセスとして、まず「善さ」の構造を突き止め、子どもたちの「善く生きる」ための支援・援助としての教育を考えることになる。

彼によれば、「善さ」の構造は三角錐で表される。人間は一人では生きられず、必ず人間のお互い同士の関係が生じており、「善い」という判断には自分だけでなく、当然相手に対する「こころやり」が含まれている(相互性)。次に、人間はだれしも自分に「こころよい」ことは歓迎し、苦しいことは避けたい。そこで、人間が「善い」という場合には、どうしてもこの「こころよさ」が考えられなければならない(効用性)。そして三番目に、今「快」であることが後に「苦」になるとか、舌には快であるが胃には苦であるとか、自分には快であっても他人には苦であるとか、そういう矛盾が生じないことが求められる(無矛盾性)。さらに、これらの三つの要求について、それらに対立や争いのない美しい関係に保ちたいといふ、美や調和への要求が存在するという(ほどよさ)。

「善さ」はまさにこの三角錐の中のどこかに決まる。しかし、「相互性」「効用性」「無矛盾性」のどこに重みをつけて判断するかは人によって、立場によって、あるいは置かれた状況によっても異なる。こうして彼は次のように結論づけている。「子どもを善くするということは、子どもたちすべて「善さ」はまさにこの三角錐の中のどこかに決まる。しかし、「相互性」「効用性」「無矛盾性」

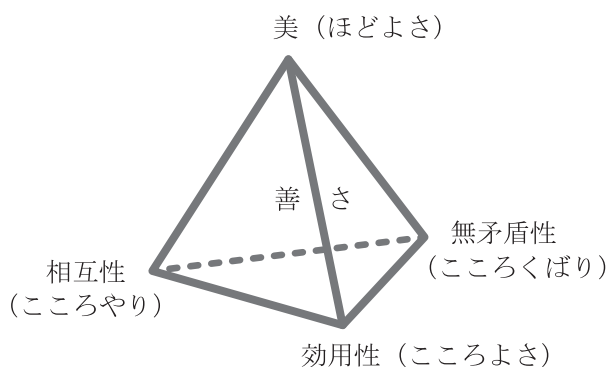


図1 「善さ」の構造⁹⁾

盾性」のどこに重みをつけて判断するかは人によって、立場によって、あるいは置かれた状況によっても異なる。」こうして彼は次のように結論づける。「子どもを善くするということは、子どもたちすべてに生まれついて分かち与えられているこの構造が、活発に働いていくように助けてやること—それ以外にはありようがないということです。「どういう子でなくてはならない」という固定した目標が「善さ」としてどこかにあるのではなく、「善さ」を求めるこの構造が活発に働く子、善さを求めてどこまでもたゆまずにその決定をしていくことのできる子を目ざして努力すればよい—それが教育だということになるのです。」

4 「教育観」と「子ども観」（教育の再興）

村井はこれまでの教育の歴史を教育観と子ども観との関係において説明している。それによると、人間の初期の教育モデルは「手細工モデル」と呼ばれるもので、教育を手細工に見立てて子どもを「形づくる」行為であったとしている。ここでは、子どもは粘土のように「可塑性」、「陶冶性」をもつもの（「粘土モデル」の子ども観）とされ、教育は染め付け行為であると考えられていた。

18世紀後半になると、ルソーはそれまでの「手細工モデル」の教育に対する猛烈な反発から「自然のまま」の教育を主張し、ルソーの考えに共感したペスタロッチやフレーベルらによって、子ども中心主義の教育実践が試みられた。村井はここでの教育観を「農耕モデル」と呼び、その子ども観を「作物モデル」であるとした。教育を農業や植物栽培に見立て、子どもは植物のように本来すくすく育つ力を持っているので、親や教師はそのための世話をしてやるのが教育だとされた。

18世紀から19世紀にかけての近代国家の出現は新たな教育観と子ども観を生みだした。近代工業国家においては、その熾烈な国際競争に打ち勝って国家的な繁栄をもたらすための道具としての教育制度の要請から強制教育（義務教育）制度が導入された。その目的は国家の統一や発展で

あって、国民の成長や福祉などを願うものではなく、教育は近代国家の成員に必要な知識・技術をもった人間を国家の要求に合わせて、能率的に作り出すためのものとなった。ここでは、効率的な人材養成の必要から教育の科学化が急速に進み、人間を科学的に解明するために犬などの動物を用いた実験が行われた。村井はこの教育を「生産モデル」と呼び、動物実験で人間を理解しようとしたことから「動物モデル」の子ども観、あるいは工場で製品を大量につくり出すように近代国家にとって都合のいい国民を大量に作り出すための材料としての子どもという意味で、「材料モデル」の子ども観と呼んだ。

近代国家によるこの教育システムは経済の発展や国の発展には大きく寄与したが、経済の発展に伴って顕在化した新たな諸問題、すなわち人間性の喪失、連帯感の希薄化、大衆化現象、核家族化、グローバル化とナショナリズム、環境破壊などには有効な解決策を提供できないとし、それに代わる新たな教育の必要性を提唱する。その教育は今までの「近代化のための」教育に代わる、「近代化した社会」にふさわしい新しい教育だとし、これを「人間モデル」の教育観と名付ける。この教育観では、人間は善さにあこがれ、それを求める存在（エロスの存在）であるとし、教育とは「善さ」を一緒に探し求める行為、減ぶべきものとしての人間が、後に続くもの（子どもたち）に、文化を学ぶことによって実際にエロスの生きることを教えていくことでもあるとする。ここでは、教師や学校に真の意味で教育の主役である子どもの自己実現をめざす取り組みが期待されるが、それは教師や学校が「善さ」を何であるかを決定するのではなく、「善く生きよう」とする子ども（人間）一人ひとりの決定に寄り添って、そのための支援・援助をすることにある。

5 まとめ

子どもをどのような存在として捉えるかによって、教師の教育観は自ずと違ったものとなる。村

井の言うように、子どもを粘土のような存在とみなすのか、または植物のような存在とみなすのか、あるいは動物に見たてたり、材料のようなものとして捉えるのかによって、子どもに向き合う姿勢は異なってくる。「粘土モデル」の子ども観に立って教育活動が行われた場合には、親や教師は「良かれと思って」教授、指導、訓育することになるが、それでは子どもたちの「善く生きよう」とする意欲には結びつかない。また、「植物モデル」の子ども観に立脚した教育活動がなされた場合には、子どもの自主的な活動は保障されるにしても、人類の文化遺産の継承としての意味を持つ基礎学力の低下の問題が生じる。一方、近代国家の教育政策にみられる「材料モデル」の子ども観では、国家の繁栄にとって役に立つ人材の育成が推し進められることとなり、その弊害は前述したとおりであろう。これに関して、中央教育審議会の最近の答申に次のように述べられている。

「近年、我が国の社会は、いわゆる「知識基盤社会」の到来や、グローバル化、情報化、少子化、高齢化、社会全体の高学歴化等を背景に、社会構造の大きな変動期を迎えており、変化のスピードもこれまでになく速くなっている。これからの社会は、政治・経済・文化等のあらゆる分野において、人材の質がその有り様を大きく左右する社会であり、教育の質が一層重要となる。特に我が国のように、天然資源に恵まれず、少子化や高齢化の進展が著しい国においては、生産性の高い知識集約型の産業構造に転換し、国際的な競争力を維持していく上で、既存知の継承だけでなく未来知を創造できる高い資質能力を有する人材を育成することは、極めて重要な課題である。」¹⁰⁾

「特に近年は、人工知能の研究やビッグデータの活用等による様々な分野における調査研究手法の開発が進められており、将来、こうした新たな知識や技術の活用により、一層社会の進歩や変化のスピードは速まる可能性がある。このような変化の中、我が国が将来に向けて更に発展し、繁栄を維持していくためには、様々な分野で活躍できる質の高い人材育成が不可欠である。こうした人

材育成の中枢を担うのが学校教育であり、その充実こそが我が国の将来を左右すると言っても過言ではない。」¹¹⁾

こうした中で、中教審答申「新しい時代の義務教育を創造する」¹²⁾では、教員に求められている資質として、①教職に対する強い情熱(教師としての使命感や誇り、子どもへの愛情や責任感など、教師として学び続ける向上心)、②教育の専門家としての確かな力量(子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導力、学級作りの力、学習指導力など)、③総合的な人間力(豊かな人間性や社会性、対人関係能力、コミュニケーション能力など)が示され、「人間は教育によってつくられると言われるが、その教育の成否は教師にかかっていると一言しても過言ではない」との認識が示されている。

確かに、国家の独立や自由、経済的な豊かさや繁栄なくして、国民の一人一人がその個性が十分に尊重され、心豊かな生涯を送ることは難しいことであろう。しかし、教育の目的はあくまでも「個人の幸福の実現」であるはずであり、国民を「国家にとっての有為な人材にすること」ではない。

経済や政治の世界は言うに及ばず、教育界においてさえ功利的な思考(利益、利得、利便、快適、繁栄など)が支配的である今日において、教師や学校に求められているものは21世紀を生き抜く有為な人材の育成であり、教師に求められている資質として上記中教審答申に示されている諸力であるとしても、村井の言う「人間モデル」の教育観・子ども観は不易であるとの認識のもと、これに沿った教育活動をすすめる、子どもたちに生まれついて分かち与えられている「善さの構造」が活発に働くようにしなければならない。

引用文献

- 1) 村井実：新・教育学のすすめ, p6, 小学館, 1978年
- 2) 村井実：新・教育学のすすめ, p6, 小学館, 1978年
- 3) 村井実：新・教育学のすすめ, p7, 小学館, 1978年
- 4) 村井実：新・教育学のすすめ, p7, 小学館, 1978年
- 5) 村井実：新・教育学のすすめ, p8, 小学館, 1978年

- 6) 村井実：新・教育学のすすめ, p 81, 小学館, 1978 年
- 7) 村井実：新・教育学のすすめ, p 87, 小学館, 1978 年
- 8) 村井実：人間と教育の根源を問う, 小学館, 1994 年
- 9) 村井実：新・教育学のすすめ, p 164 より著者作成
- 10) 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」(答申), 2006 年
- 11) 中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて」(答申), 2015 年
- 12) 中央教育審議会「新しい時代の義務教育を創造する」(答申), 2005 年

参考文献

- 1) 村井実：村井実著作集 2, 教育の再興, 小学館 1987 年
- 2) 村井実：村井実著作集 1, 教育学入門, 小学館 1988 年
- 3) 村井実：「善さ」の復興, 東洋館出版社, 1998 年
- 4) 村井実：教育の理想, 慶應義塾大学出版会, 2002 年
- 5) 村井実：教師と「人間観」, 東洋館出版社, 2015 年
- 6) 中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(答申), 2012 年